

「ウルシはとっても
贅沢な木」(上)

1 漆とウルシ

漆(以下、塗料として使う場合は漆を、植物として使う場合はウルシノキと表現)は、縄文時代の遺跡から出土され、その草創期まで遡ることができると言われております。このことから、漆は日本人の生活にとって非常に身近な存在であったことが分かります。

漆器は英語でジャパンと言います(写真1)、ウルシノキ(写真2)は日本には自生しておりません。ウルシノキの原産地は、中央アジア高原やインド、チベット、中国南部雲



写真1 漆を塗っている様子

南などの高原地方と言われており、中国から朝鮮半島を経て渡来し、七世紀頃には栽培されていたと言われております。

最近の研究では、日本と中国と韓国のウルシノキの葉緑体を分析したところ、図1のとおり日本のウルシノキは中国とは別のタイプであることが明らかにされています。

ウルシノキは、人が植えたところか、人里に近い日当たりの良い畑の脇などにはありますが、秋になると紅葉して私たちの目を楽ませてくれるヤマウルシ(写真3)と比べ葉は厚く丸みがあり、別の種であります。

2 ウルシノキは贅沢な木

ウルシノキの適地は、一般的に1.「朝から夕方まで一日中良く日が当



写真2 ウルシノキ

る」、2.「表層から50cm位まで軟らかで、水の動きが良い」腐植質の多い肥沃なところで、3.「根はきわめて好氣的で」、「水はけの悪い過湿地では根が腐って」しまうとされています。

また、「草や木に少しでも被圧されると真っ先に枯れてゆく、日陰に最も弱い木の仲間」に属「すことから、生長の旺盛な木や草から保護するために、下刈りなどを行う必要があります。

このようにウルシノキは非常に贅沢な木で、場所を選び、手間も掛かります。一度植えてしまえば順調に育つと言うものではなく、簡単に言うところ「果樹園と同様か或はそれ以上の配慮」が必要な木と言うことになります。

ウルシノキは、土壌などの立地環境が良く、耕うん施肥などの手入れを行えばきわめて生長が良く、反対の場合は極端に生長が悪いばかりの大きい木です。

元岩手県職員であった庄司清三氏(昭和11年)は、「表土浅き砂礫土に根を露出(写真4)するもよく生育している漆樹を数々見たがこれは漆樹の土質に対する要求度の小なると推察し」、また「漆樹の生長(正常なる)は土壤中湿度より陽光の関係大

ウルシ葉緑体DNAの解析材料

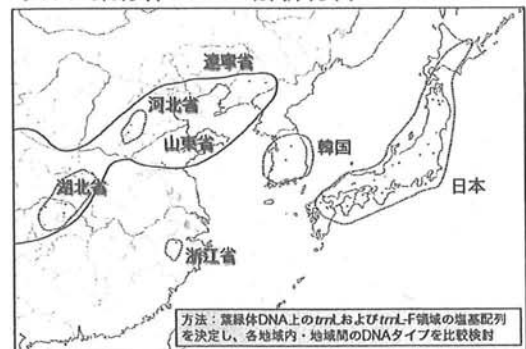


図1 日本・韓国・中国のウルシノキの葉緑体の分析結果(漆に関するシンポジウム(H20.12.16)から引用)

なるを認めると共に土壌の浅き地に存するものは生長遅きを認め」と報告しており、日が当たっている限りはしぶとく生長を続けられる木ともいうことができ、原産地の高原の乾燥気味の環境と符合するとも言えます。

3 漆液の産出量、品質と気候

「ウルシノキはもともとと南方から来た木で、春が早くきて、秋が長く、ゆっくり冬に向かって行く生長期間が長いところに分布を広げやすい木」と考えられており、庄司氏(昭和10年)の「漆液の産出量及び品質に及ぼす気候要素に就いて」において、漆掻き職人からの聞き取りの結果として、「岩手県に於ける漆液の

最良地は気仙郡にして、又此の地は産出量も最も多く（漆樹の大きさ同一のものに就き）殊に世田米街道一帯は最も優れ三河産に劣らず、又下閉伊郡刈屋村、和井内より宮古町に至る一帯、宮古より山田及豊間根村を中心とする一帯は二戸地方のものに比し品質優良なるを産するが産出量少なく、岩泉を中心とせる大川、小川の2ヶ所良好なるが川井、小国の山間部のものはいずれも前地より品質、産漆量共に劣る。県南としては和賀郡谷内村附近より江刺郡境に至る地方が品質劣るが乾燥力に富む漆を産する。」と、また庄司氏自身の調査結果でも「前記経験者の報告と大差なく即ち気仙郡世田米街道に沿う横田村、竹駒村及び上有住村の山間部及び上閉伊郡栗橋村より鶴住

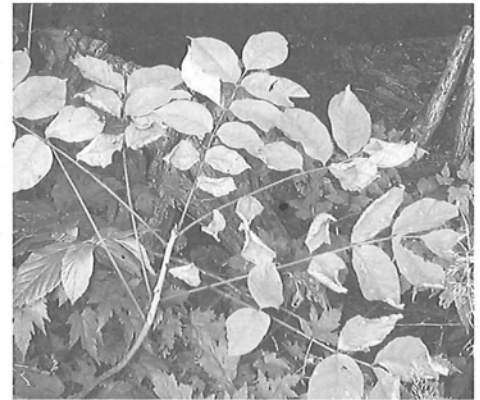


写真3 ヤマウルシの紅葉



写真5 山地に植栽されたウルシ林

居村に至る街道附近には老樹の漆樹を見る事珍しくなく其の樹型、生長状態共に良好にして樹皮厚く、滲出せる漆液は乾燥遅きも品質良好なるものである。又刈屋村和井内を隔て押角峠を越え大川、小川村に通ずる街道附近も前者に比し少々（原…稍々）劣ると雖良好である。又県南のものは県北のものに比し産漆量少々劣るが品質は一般に良好である。」と報告しております。



写真4 砂礫地に生育するウルシノキの根部 (庄司 (1936) から引用)

4 ウルシノキの品種

高野氏（岩手県林研報第一号、昭和25年）は、「ウルシの品種としては、従来一般にモチハダ、ナシハダ、雌木、雄木、及び実を採取する目的のために、ぶどう房、ささつら、えび房等の種類があり、雄木とモチハダが、ナシハダ、雌木に比べて、漆液の産出量も多く品質もすぐれているといわれているが、これら（元…之等）も樹皮の色合い、粗密度、樹葉の厚薄、大小、或は結実の有無による区分で、その（元…其の）中間種のものも多数あり、判然とした分類法はないようである。

漆掻を業としている者は掻き鎌の刃当りによって、ナシハダ、モチハダを識別しているとのことであるが、これ等の人の体験を通じて、漆液のよく出る樹と出ない樹を分類して見ると下記のように、漆液のよく出る樹の方にモチハダが多く、漆液のよく出ない樹の方にナシハダが多いように思われる。」と報告している。さらに、「漆液のよく出る樹は、一、雄樹。二、孤立木、疎立木。三、陽地に生育せる樹。四、闊葉樹、特にドロノキ類が適当に生育している處にある樹。五、枝角度が鈍角で枝間の短い樹。六、丸葉、厚葉。七、黒肌木（モチハダ）。八、掻き鎌に

て樹皮に傷を付けると手応えの柔らかい樹。」としているが、モチハダ、ナシハダについても、「ウルシ樹の生立地に於ける土壌、環境等に支配され：」今後に残された問題としております。インターネットで検索可能な森林総合研究所の研究報告、日本森林学会誌を渉猟した範囲では、定説はないようであります。

林業技術センター

首席専門研究員 小林 光憲



漆は塗料として利用される



収穫した生漆